

<p>経済・経営</p>	<p>【代表的な研究テーマ】</p> <p>□ 外部資源の利用のダイナミズム</p> <p>□ 経営の可視化</p>
<p>key word</p>	<p>課題解決に役立つシーズの説明</p>
<ul style="list-style-type: none"> ■ アライアンス ■ パナソニック ■ スマートフォン ■ 特許分析 ■ 社会ネットワーク分析 ■ 国際比較 	<p>主な研究テーマは、既存企業が後発、資源不足、競争劣位といった不利な状態から、どのように競争優位を構築・再構築していくか、その構築・再構築の方法やプロセスの解明にあります。特に構築の方法として、近年欠かせない他企業の外部資源の利用に焦点を置いています。また、競争優位の構築を分析する際、可視化ツールの導入・開発も試みます。</p> <p>【1】アライアンスによる後発企業のキャッチアップと競争優位の再構築</p> <p>企業の経営体系や不利のシチュエーションが多く、外部資源利用の仕方とも様々なため、上述の研究テーマといっても、研究対象と研究の切り口は非常に多種多様にわたります。最初に注目した事例は、コンピュータ産業におけるパナソニック(旧・松下電器)のキャッチアッププロセスでした。この研究は、汎用コンピュータ産業から撤退したパナソニックは、アライアンス相手との交渉ポリティクスの中かで、アライアンスからコンピュータのコア技術を獲得してきたダイナミズムを時系列に分析しました。一方、パナソニックは「レッツノート」というブランドのモバイルノートパソコンで競争優位を確立できたのは、アライアンスから獲得した資源の内部化、外部資源と社内資源との整理と融合、資源の統合による経営パラダイムの転換などに関わっています。それらのメカニズムの解明も必要であり、現在研究が進行中です。</p> <p>【2】経営の可視化</p> <p>上述の研究テーマは定性分析を中心に行われていますが、経営パラダイムの転換、競争優位の構築等の事態を遡及的に捕捉するのは難しいと感じます。そのため、社会ネットワーク分析やテキスト分析、特許分析といった定量的な方法を導入し、アライアンス、分業体制といった組織間関係の可視化を図り、現状をより具体的なレベルで解明していくように努めています。例えば、パナソニックの事例を用い、2000年代初期におけるパナソニックの社内の組織間関係の調整を通じた再生メカニズムや、パナソニックとソニーグループの競争優位再構築戦略の傾向と違い(前者は垂直統合強化、後者は水平分業強化)などを可視化し明らかにしました。上述の可視化ツールをさらにスマートフォン各社の技術開発の傾向解明に応用し、日本情報家電企業がスマートフォン技術の選択にあたり、既存技術を重視し、世界市場におけるニーズから乖離していた可能性が高いと推測できました。直近の研究として、パナソニックの近年の20年を及んだ経営改革をテキスト分析によってその全体像を俯瞰しパナソニックの経営改革の本質と可能性を明らかにしました。これまでの研究成果をもとに、日本企業・産業競争力の回復に向けてベンダー／部品企業の戦略や日本のグローバル協力体制のあり方を研究し、有意義な提案ができればと思われまます。</p>
	
<p>陳 韻如 Chen Yunju</p>	
<p>経済学部 教授</p>	
<p>【プロフィール】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●台湾大学管理学院 国際企業学系 卒業 ●京都大学大学院 経済学研究科 修士課程 修了 ●京都大学大学院 経済学研究科 博士課程 修了 (経済学博士) ●九州国際大学講師／准教授 ●滋賀大学 経済学部, 教授 <p>【主な社会的活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●所属学会 日本経営学会 組織学会 日本労務学会 国際ビジネス研究学会 <p>【研究テーマの履歴】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パナソニックのコンピュータ産業におけるキャッチアッププロセス ・標準化プロセス ・企業再生の国際比較 ・特許分析・社会ネットワーク分析に見るスマートフォン戦略 	
	<p>企業・自治体へのメッセージ</p> <p>IoT分野の連携に関して調査を協力いただける企業(自治体)を探しています。また、海外や台湾と連携する際のサポートも可能です。</p>